屋上に寝て……、空を見て

スラフィア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
屋上に寝て……、空を見て

【Ｎコード】
Ｎ２２７３Ｋ

【作者名】
スラフィア

【あらすじ】
一度で良いから授業すっぽかして、屋上でのんびりしたいなあ。
そんな作者の淡い願望とやらがきっかけになった短編です。
高校３年生のある少年が、社会の授業をさぼって屋上でゆっくりしていたら……。とまあ、そんな感じです。

（前書き）

ジャンルはその他でよかったでしょうか……。

授業開始のチャイムが響いている。

その音は、校舎の屋上で寝そべって、何ともなしに空を眺めている俺の耳にも届いていた。

本当なら、今から急いで教室へ走って戻って滑り込みセーフ、なんてやって、教師に小言を食らいつつ席に着くのが正しいんだろうけど。

そんなの面倒だし。

俺はもう少し寝てよっと。

確か、次の授業は社会科の何かだったはず。

教室にいてもいなくても、変わんねーな。

どうせ戻っても、授業中は寝てるだけだし。

……あ、チャイムが鳴り終わった。

俺はいつも、こうして屋上で空を眺めている。

いつも、というと語弊があるかもしれないが、大方その表現で間違っていないと思う。

高校は勉強するために自主的に来るところだ。

それは認める。

こんな風にサボってばかりいると、いつかは取り返しの付かないことになるだろう。

それも承知してる。

けど、何て言うか、こののんびりとした時間を今満喫できると思えば、そんなことはどうでもよくなってくるんだよね。

退学になったら、家の屋根にでも登って同じようにのんびりするか。

それよりもどうせ、あと半年くらいすれば俺は卒業するんだし。単位取れなくて留年を宣告される可能性も無くはないけどな。そしたら年齢が高校教育の限界を超えるその日まで、あるいは退学させられるその日まで、俺は屋上に寝っ転がって過ごすよ。

ゆっくりのんびり、白くて軽そうな雲が、風に吹かれて流されていく。

……あ、あの雲、うちの校章と同じ形してら。

……ねむ。

かちゃり、という音が聞こえた。

……ドアの音か？

屋上と室内を繋ぐドアは、風雨に錆びてぼろぼろだ。
けれど、錆び付いた音はしない。
ちょうど今みたいに、かちゃりといい音を鳴らして開くんだ。

授業さぼりの多さを見かねて、誰か教師が連れ戻しにでも来たのかね。
そっちを見ることはない。

こつこつと、コンクリートを叩く足音は、俺のすぐ横で止まる。

俺は横目使いで、目線だけをそっちに向けた。

教師の靴じゃない。

これは生徒用の上履きだ。

生徒の誰かか。

教師の使いっ走りとか、ご苦労なことだ。

俺はやっと、やって来たそいつの方を見る。

———んで。

見て、すぐに背けた。

「……お前かよ」

俺の嫌そうな声が聞こえなかったはずはないだろうに、そいつは俺のすぐ隣まで歩いてきて、その場所にふわりと腰を下ろす。何となく雰囲気で分かった。

こっちは意地でも空を見上げたままで、話しかけもしなかったからな。

……いや、「お前かよ」って言ったっけ。それに足下だけとはいえ、ちらっと見たなそういえば。

だから、ほんの少し悔しいんだろうか。

何でかは俺にも分かんないけど。ていうかどうしてそういう結論に至ったのかも分かんないけど。

俺の隣で、腕を後ろに突っ張って支えにして座り込んでるそいつは、ふいに長い吐息を漏らしてから言う。

「はぁ～――――……良い天気で、気持ちいいね？」

「……」

俺への質問だってのは分かる。屋上には二人っきりなんだから。が、敢えて答えない。

まあ本当だったら敢えても何も、授業時間に生徒が2人も屋上でのんびりしてるのは相当おかしい事態なんだけどな。

「気持ちいいね？」

「……」

無視無視。

ていうか帰れよ。俺ののんびりしてる時間を奪うな。

「気・持・ち・い・い・ね？」

「……。お前、授業はどうしたんだよ」

「キミには言われたくないな。しかもその態度は何。人がせっかく心配してこうして探しに来てあげたというのに」

「心配とか……お前はほんと嘘らしい嘘をつくのな」

「なんで？」

「最初に屋上に探しに来たのは、俺がここにいるの知ってるからだろ」

「知らないよそんなの」

「じゃあ何か、お前は俺のことを飛び降り願望がある人だとか思ってんのか」

「被害妄想」
「……」
ばっさり切りやがって、つまんねえ奴。
俺はまた何も言う気が無くなって、目を瞑る。
そして念じる。早く教室帰っちまえ。もう一度言うけど俺ののんびりしてる時間を奪うな。

「昔はさあ、中学校の頃だっけ？　よくこうやって屋上で二人で授業すっぽかしてたよねー」
「……」
「それってよく考えたらワル風のデートだよね？　きゃー恥ずかしー」
「……きゃー恥ずかしーじゃねえよ。馬鹿だろお前。あと学校デートで喜ぶな」
「なんで？」
「……学校は勉強するところだからだ」
「あんたがそれ言いますか。じゃあ勉強しに戻ろうよ」
「やなこった」
「なんで？」
「……お前さっきからなんでばっか言い過ぎなんだよ。いいだろ何でも。ほっとけよ」
「ふーん……」
何かしら意味ありげな「ふーん」を放ったそいつは、ようやく静かになった。

……そいつ、って言うだけだと分かりづらいだろうから、説明しておく。

こいつは俺の幼馴染みだ。

女子だけど、どっちかと言ったら悪ガキ仲間という意味の幼馴染みな。

昔はそれこそ兄弟姉妹の関係のようにじゃれ合って遊んでいた俺達だが、中学入った頃からだろうか、大人の意識でも芽生えたのか、段々と親しく遊ぶ機会が少なくなっていった。

そんな中で、屋上で二人して寝そべっている時だけは、ガキの頃に戻ったような気分になったものだ。

教師から言わせれば、今の俺達も充分ガキなんだろうけど。

「そういえば久しぶりだよね、こうやって二人で授業抜かすのも」

「……久しぶりの余韻なんかいらねえからお前はさっさと帰れっての」

「ねえ、何でそんなに冷たいの？」

「……。……お前は大学行くんだろ？」

「……まあね」

「じゃあちゃんと授業受けろよ」

「ぷっ、まさか屋上で昼寝してる授業さぼりの常習犯にそんな説教をされることになるとは」

「うっせーな……これでもこっちは心配してん」

「あらまぁありがとう。嬉しいわ、わたしのことを心配してくれるなんて……きゃー恥ずかしー」

「……お前はもう本格的にムカつく奴だな」

さっきっから、ふざけたような台詞を吐いてこっちを馬鹿にするところが特にムカつく。

……はあ、俺なんかに付き合って授業抜かしたりして、大学受験落ちたって知らねーぞ？

で、落ちたとしても絶対泣きついてきたりすんじゃねーよ。鬱陶しいだろうし。

……はぁ、大学ねえ。

俺も漠然と行きたいなと思ったことはあったさ。でも屋上に寝そべって空を眺めてのんびりできる大学なんかあるわけねーよな。どこ入ったって結局退学になるんなら、受験勉強なんかに時間を費やすのはもったいない。この高校は大して勉強しなくてもぎりぎりで入れたけど、さすがに大学にはそんなに都合の良いところは無いだろうし。

「もしわたしが大学行けなかったら、どうする？」

「……」

「どうする？」

「……お前の言葉には主語がねえよ。誰も何もしねえだろ別に」

「しないの？」

「しねーよ」

「嬉しい？」

「……別に嬉しくはねえよ。悲しくもないけど」

「うわひっど。喜びも悲しみも共有してこそ真の幼馴染みでしょ」

「俺はお前と真の幼馴染みになろうと思ったことはねえ。共有なんかできなくて一向に構わない」

「でもわたしにはあなたの今の心境が分かりますよ」
「誰だって分かるだろ、今の俺の様子を見れば」
「のんびりできて幸せなんでしょ？」
「横の馬鹿がうるさくて幸せは半減してるけどな」
「……」
「……」
「……ふふ、久しぶりだからってそんなに照れなくてもいいのに」
「どうしてそういう結論に至るんだよ。やっぱ馬鹿だろお前」
「馬鹿じゃないし」
「……そうだよな。お前、すっかり優等生キャラに変わっちまってさあ。昔は俺より成績悪いこともあったのに」
「あっそ、ごめんねぇ」
「……」

そろそろ俺の我慢は限界に近付きつつあるんだが。

こいつは昔っからずっとこんな調子だもんな。俺はこいつと一緒にいても、いつも言いくるめられるか何かして悔しい思いを味わう。さっきのはそれが先駆けて感じられたのかもしれない。
だいぶ長い付き合いだし、俺がどう扱われるとどう思われるのか、こいつは委細承知してる。その上でわざとムカつかせるような態度を取っているのだ。嫌な奴だ。
もっとも、これは最近になって何となく気付いたことだけど。

少し、風が吹いた。
前髪や学生服が風に煽られて、揺れる。俺の顔のすぐ横では、スカートがぱたぱた言っていてものすごく気まずいんだが、隣の馬鹿はまるで気に止めない。

その上、

「いい風が吹いてるね。わたしも寝よっかなー」

なんて言ったと思ったら、俺の返事も待たずに、少し前に移動してからばったりと仰向けになりやがった。そのせいで、二人して並んで寝ているような状態になる。

「……お前な、あんまくっついてくんな」
「別に動いてないよ？」
「そういう問題じゃなくてさ……」
「じゃあどういう問題？」
「……。……もう、早く教室戻れよ」
「やだ。この気持ちいい場所を独り占めとかずるい」
「……じゃあ俺が帰るわ」
「えーなんで？」
「なんでじゃねえよ。一分前の自分と言ってること正反対だぞ」
「女心は秋の空って言うじゃん」
「そっかそっか。じゃあ俺の代わりにお前が独り占めすれば」
「あなたが戻るならわたしも戻ります」
「……。……あんまくっついてくんなってのは、そういう問題だよ」
「……」

おお、なんか上手いことまとまった。自分でも予期せぬ感じで言葉が出たよ。

並ぶように寝っ転がってから、その間ずっとそよそよと控えめに吹いていた風だが、俺達の会話が止まった途端に、合わせたようにして止んだ。

……やっぱり、並んで寝てるってのがおかしい。俺達はもう高３で、男子と女子という関係で、いくら幼い頃から同じ布団で寝るような仲だったとしても、それなりに距離を置かなきゃならない時期のはずで、だから最近もこうして一緒にいることも少なくなってきたというのに。

こいつはまだそういうことを感じないんだろうか。

「ねえ」
「……何だよ」
「……いや、別に？　何でもないよ」
「じゃあ呼ぶな」
「ねえ」
「……」
「ねえってば」
「……」
「無視しないでよ」
「お前はうるせーんだよ。ちょっと黙ってろ」
「ねえ」
「……」
「ねえ！」
「……んだよ。また何でもないとか言ったら蹴るぞ」
「暴力変態」
「微妙に意味違うだろ。あと話を逸らすな」
「……。……ん。いや、あの……ごめんね。やっぱいい」
「蹴っていいな」
「何でもないとは言ってないじゃん！」

お前が言ってるの、相当な屁理屈だぞ。同じような意味だろうが。

と、再び風が吹き始めた。さっきよりも強く、服がばたばたとはためいて、屋上の隅っこに植えられた屋上緑化何たらのための草木の枝が大きく揺れ動いて———

「付き合ってよ」

風の音に混じって、小さく告げられた、言葉。

「……」
「……」
「……」
「……」
「……は？」
「いや、いやその、ほ、放課後！　放課後どうせ暇なんでしょ、ちょっと付き合ってよ」
「どういう意味だ？」
「ほら……明日、わたしのお父さんの誕生日じゃん？」
「知らねーよそんなこと」
「誕生日なの！　で、今日プレゼント買いに行くの。選ぶの手伝ってよ」
「やだよ面倒だし」
「お願い、何か好きなお菓子買ってあげるから」
「……お前俺のこと馬鹿にしてんだろ。お菓子如きで釣られるか」

「じゃあ何なら釣られるの？」
「お前の餌なんかじゃ釣られねえよ。ていうか俺が手伝わなくても、父親にあげるプレゼントなんか何にしたって喜ばれんじゃねえの？　娘から直に誕生日プレゼントだぜ？」
「……じゃあカエルの卵でもいいと思う？」
「極論過ぎんだろ。あのなお前、常識で考えろ。誕生日にカエルの卵贈ってくる奴なんかいたら俺はそいつをぶっ飛ばすよ」
「もしわたしが贈ってもぶっ飛ばす？」
「……お前の場合は、そうだな、孵化させてオタマジャクシにしてからお前の誕生日にお前の鞄の中に流し込む」
「うわサイテー。常識欠如」
「お前には言われたくないな」
「でもカエルの卵ってなかなか手に入らないと思うんだ。それに卵から育てたら愛情も沸くと思わない？」
「引かれるよ普通に。カエルの卵貰って喜ぶのヤゴくらいだっつの」
「そんなに文句付けるならだから選ぶの手伝ってよ」

文句じゃねーよ。親切な忠告だよ。

……それにしてもさ、びっくりした。付き合ってよってもっと深い意味で言ってんのかと思ったじゃないか。焦って「……は？」しか言う言葉が思いつかなかったし……真面目に返されたらどう答えようか本気で悩んでたぜ、きっと。

何かちょっと、どこか残念な気分がするのは否定できないけど。

相変わらず二人で並んで寝たまま、空を見ている。
しばらく無言の時間だった。迷惑だなあと感じていたお喋りも、

無ければ無いで何だかやけに静かな感じがする。
眠気もすっかり覚めちゃったし。

「……いいよ」
「何が？」
「付き合ってやるよ、プレゼント選び」
「なんで？」
「……そこでなんでって言うか？」
「冗談だよ冗談。あはは」
「……やっぱ取り消し。1人で行け」
「え、嘘なの？　ひきょー取り消しとか、男が一度言ったことを取り消すなんて恥ずかしくないの？」
「生憎と俺には男がどうのというポリシーはねえし」
「このオカマ。みんなに言いふらしてやるから」
「……何その微妙な脅し」
「微妙じゃないし。効果絶大」
「勝手にそう思ってろ」

ちょっと、行ってやってもいいかなと思いかけてたのだが、もう嫌だ。絶対行かねえ。
本当にこいつは俺をムカつかせるのが得意だな。

「ねー、一緒にプレゼント選んでよ。一回言ったんじゃん自分でさー」
「お断り」
「だってどうせ勉強なんかするわけないんだし、やること無いんでしょ？　ちょっとくらいいいじゃん。それでその後デートしようよ」

「……お前さらっとデートって言ったな。余計嫌だから。プレゼント選びくらいならまだいいけど、お前とデートするくらいなら俺は母親とデートする」
「ふうん、まだいいんだ？　じゃプレゼント選び、付き合ってね」
「いや、あの」
「決定事項」

……くっそ、この野郎。
お前もう将来、悪徳商法のセールスマンとかになれる舌技を持ってるよ。

ふと横を見れば、してやったりの笑みを浮かべている幼馴染みの顔が目に入って……体の奥底から何とも言えない思いが込み上げてくる。
お前……いつか絶対一泡吹かせてやるからな。

……あ、チャイムが鳴ってる。
授業終了を示す音。これで授業すっぽかし確定だな。生徒が二人も授業をさぼって、社会科教師はさぞご立腹だろう。

隣で、ばっと勢いよく起き上がる気配がした。

「さあ、教室戻ろ！」
「……」
「戻るぞ！」
「……はぁ～」
「何を溜息なんかついて、若いくせに情けない。ほら、次の授業も

頑張るぞ！」
「次の授業『も』は変だろ」
「そんで頑張って勉強して、頭良くなって、良い成績取って良い大学行くんだから！」
「それはお前の話な」

何だよ、急にテンション高くなりやがってまあ……。

……でも。お前の行きたい大学が、ぼちぼち授業さぼって屋上に来てても何とか在学していられるようなそんな所なら、目指して頑張ってみてもいいよ。
落ちたらそこまでだけど。

そんなことを思いながら、俺はゆっくりと体を起こした。

……あ、あの雲、誰かさんの横顔にそっくりじゃね？

（後書き）

ちなみに、この小説は６０００字小説になってます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2273k/

屋上に寝て……、空を見て

2011年10月6日00時16分発行